

## 編集後記

○ 丸谷才一の「忠臣蔵とは何か」という文芸評論が昨年の時評欄を賑わしたが、近世文学研究の一端にかかずらわっている者として、最近の八大伝ブームとともに、近世文学の活性化の一つになるかと興あることであつた。ただ、「文学の伝統が事件を惹き起し」

(曾我の御霊信仰説話と劇化が赤穂浪士の仇討事件を誘引した)。「その事件が文学作品を形成する」(体制呪咀の忠臣蔵劇化となる)。「あとがきの文章V」という都合のよすぎる立論に眉唾の感もなきにしもあらずで、お軽勘平をカーニヴァルの祭儀に擬するに至っては、飛躍もいところで、文芸評論なるかなの感を久しうしたことであつた。民俗学的方法論の曲芸的適用とでも評すべきであろうか。

○ 「新劇」昭和六十年三月号で、諏訪春雄氏が「御霊信仰と判官びいき―丸谷才一氏『忠臣蔵とは何か』への疑問―」という論を発表、近世演劇研究の専門家としての立場から才一流忠臣蔵論への疑問を提示された。丸谷の論旨を刻明に追求分析しながら、そこに明らかとなった事実の誤認と論理の飛躍を

証的に究明、礼を尽しながらも御霊信仰説の虚妄の説たるを説いてあつた。この批判は、「江戸時代に対する偏見」即ち「江戸時代は怨霊が跳梁し、そこに生きた人々は政府の圧政と災害に苦しみ、毎年の新春から体制転覆の呪咀劇を上演していた」という具合な「新しい江戸時代暗黒論の復活」につながるのではないかという研究者としての良心的危惧からのものうかがえた。

○ 丸谷氏は「群像」五月号で「お軽と勘平のために―諏訪春雄に答える―」と、早速反論を提出された。諏訪氏をテキストの読めない国文学者と極め付けての反論は、文芸評論家の変幻自在な姿勢を如実に示していて興あるが、その実態は「群像」六月号の諏訪氏の再批判「忠臣蔵のために―丸谷才一氏に問う―」の表現を借るを便とする。「巧妙な論旨のすりかえ」と「相手の論理の無断借用」、更に言えば論者に対する巧妙にして多彩な罵倒とが、その実態と言うべきであつた。無断借用も時には失敗するので、諏訪氏の呪咀劇とされる「仮名手本忠臣蔵」の祝言性如何との疑問に対し、当代の禁令(この論点は諏訪氏の論の無断借用、丸谷氏は「忠臣蔵とは何か」において幕藩体制の禁令など々と無頓

着に論を進めておられた。)をかわすための二枚舌だという観点を提出される。裏を読み取れと言われるのであるが、裏を読み取ることには熱中すれば、どんな立論だって可能となるのである。合理性のある、実証性のある裏の読み取りでなくてはならないのであるが、「その程度で話がすむのは、初心者向けの注釈書を書くときだけだ。」という理由で、自分の読み方を押し付けられても困るのである。

才一流テキストの読み方が正しいことを、初心者にも判るように実証的説得がなされない限り、私も初心者には納得しないのである。

○ ともあれ、この反論で丸谷氏は二つの設問を諏訪氏に提出された、「『仮名手本忠臣蔵』が日本人に愛好された理由五ヶ条のやうな、他愛ない箇条書では困る。」との条件付である。解答を提出すれば、又例の調子で揶揄されることは判つている図式であるが、諏訪氏は再批判において律儀に答えられている。曾我狂言が宝永六年正月以後吉例として上演される理由が將軍綱吉の死と関係あるかとの設問について言えば、当代の文献資料の信すべきを論じながら丸谷氏の誤認を訂して、団十郎の艾売口上の評判からの興行的成功との資料(丸谷氏はこの資料を信用されな

い。の記述を肯定し、年賀の祝意としての曾我狂言の恒例化を立証せられる。悪王綱吉の死との関連を認めようとせられないので、頑迷固陋にして実証にこだわる国文学者は納得させても、不覇奔放にして空想力を重んじる丸谷氏を納得させることは不可能と推察された。曾我狂言と綱吉呪咀を結び付けるような文献資料が残っているはずもなかったから、丸谷氏は実証を重んずる国文学者に無理難題を押し付けているのであって、丸谷氏の空想的論理に都合のよい解答を得ようとしても無理なことであった。

○ 丸谷氏の再反論は、「文学の研究とは何か」という大上段にふりかぶった題で「群像」七月号に掲載された。例によって「素朴なりアリズムは思考力の弱さと結びついている。」と論者を規定して、「論敵の人格を誹謗すること熱中」（誹訪氏の態度を評する丸谷氏の文章である、私自身は誹訪氏の文章に個人的人格の誹謗に当る部分を見出し得なかったけれど、しなごらの反論である。誹訪氏の事実の挙例にはさすが脱帽しながら、例えばあれほどこだわって論証しようとした浪士討入の時の火事装束の件について、「しかし実を言えば、火事装束だったかどうかといふ

ことは大した問題ではない。」と逃げ、討入の時火事装束の者も多く居たと論証する誹訪氏を「これがつまり素朴なりアリズム」と笑殺、自説に固執した論を展開するのである。空想的と評された自説のくり返しであるから、不毛の論議で稔りなしである。そして、誹訪氏が再批判で提出された三つの課題について、「彼の言うような「具体的」な証明などできるはずはない。」とし、そういう要求をする誹訪氏は「日本文学の研究は明治時代にはじまったため、（これもウソである、近世の国学の存在を何と考えておられるのか。西洋十九世紀の実証的方法の影響を決定的に受けた。」「実証信仰」という悪しき学風に毒されたる国文学者であると決め付けている。誹訪氏の批判に対して、誠実に応えようとは、当初から考えておられないのではないかと思われるのである。

○ 先般の春の日本近世文学会場で誹訪氏にあいさつした時、あれはもう止めましたと苦笑されていた。海千山千の文芸評論家と不毛な論議を重ねたところで、多彩な罵倒の語彙が増えるだけと判断されたのであろう。論壇で活躍中の小説家兼文芸評論家にとつて、国文学の研究者は、「視野はむやみに狭く」

て「文学的好尚としての写実主義や誠実主義との野合」ともいうべき「実証信仰」に陥った人種と映るのであろう。しかし、少くも私は、形容句は別として、実証を常に伴う文学の研究者でありたいと思うのである。

○ それにしても、才一流曾我狂言綱吉呪咀説が認められるとすると、丸谷氏が浪士討入成功後「戦記よりもいつそ『傾城色三味線』や『奥の細道』で気晴らしをしたいなど思ったのではないか。」と触れられた芭蕉なども、体制呪咀していた一人となるのであろうか。芭蕉が「おくのほそ道」の旅に出たのが元禄二年、日光に参詣して「あらたうと青葉若葉の日の光」の句を詠んだのは、どういう気持だったのであろうか。少くも表面的には自然と東照大権現の賛仰である、これを芭蕉の二枚舌と論ずるのであろうか、元禄二年はいまだ綱吉も悪王というべき存在ではなかったと論ずるのであろうか、戦国の残影ある元禄の世に、民衆が多く体制呪咀者であったとするには、それだけの論証をすべきであると思われる。綱吉時代の天災をいくら列挙しても、その論証とはならないのである。戦国の乱世よりも、儒教倫理による封建体制の方が、平和を愛する民衆にとって受け入れ易い

ものであることは自明のことといえよう。才一流体制呪詛論は、安易に容認できないのである。

○ 本号の執筆者の一人片岡徳雄氏は、広島大学教育学部の教育社会学教室の教授であり、本学の非常勤講師でもあられた方である。教育社会学の大きな課題である親子関係について、日本の大衆芸能の中に如何に顕現しているかを壮大な構想のもとに解明しようとされ、まず説教浄瑠璃から調査研究を始められており、その成果の一端を本誌に御投稿いただいたのである。又、小川幸三氏は熊本商科大学の助教授であり、かつて本学の非常勤講師をして居て下さった方である。湯之上教授とともに連歌研究に精進しておられるが、今回はその調査研究の一部を御投稿いただいたのである。ともに、本誌の学界における評価を高めるものと信じ、御好意に深謝申しあげる次第である。

○ 昨年度末、井上一郎氏が奈良教育大学助教授として奈良の地へ赴任された。井上氏は、本学に初等教育学科を設置した時、国語教育法、国語科教材研究専攻の専任講師として御来学いただいた方である。大阪教育大学大学院修士課程修了後、高等学校の教諭とし

て研究を続けておられ、本学御赴任後も教育に研究に目ざましい成果を挙げてこられたのであるが、今後は新任校で一層の研鑽を積まれんことを望むものである。

○ 本年度は、五名の先生方が一挙に新任として赴任された。書道専修の課程が増設されたに伴って神田幸男講師、三迫先生の後任として西村秀人助教授、河村先生の後任として角重始助教授、井上先生の後任として菅原敬三助教授、そして下垣内和人助教授の五名である。それに、文学部共通の教務職員として吉村衣世さんが採用された。

○ 神田幸男氏（昭和十六年四月十七日生）は、永らく本学書道の非常勤講師を勤められた方であって、卒業生諸子には周知の方である。先生は、高校卒業後書家としての大成を志し、書道塾を経営しながら京都の高名な書家故木村知石先生の内弟子として研鑽を積まれ、現在は古谷蒼韻先生に師事して書家としての道を歩みながら、縁あって本学書道の非常勤の先生となっていたいたのである。が、塚田先生のもとに書道専修の課程を開設するに当って専任となっていたいたのである。四年後には、本学にも書道の教師が巣立つのであるが、秀れた教師が育つよう努力し

ていただきたいものである。

○ 西村秀人氏（昭和二十四年十一月五日生）は、昭和四十九年に慶応義塾大学文学部社会学・心理・教育学科（社会学専攻）を御卒業後、昭和五十年九州大学文学部に再入学、昭和五十四年同上中国文学科卒業、引き続き九州大学大学院文学研究科中国文学専攻博士課程前期入学、昭和五十六年文学修士、昭和五十八年同上博士課程後期退学、同時に九州大学文学部助手（中国文学教室）に就任、同時に福岡教育大学、西南学院大学の非常勤講師（中国語）併任、この四月縁あって本学助教授として御赴任いただいた。先生の研究課題は、中国近世文学思想史で、明清時代の文学理論の史的展開の様相を究明しようとするもので、「袁中郎の性靈説と李卓吾の思想」（「日本中国学会報」第三十五集）などは、学界で極めて高い評価を得たものである。その上、先生は中国語にも堪能で、本学における活躍が期待される、教育に研究に若い息吹をお願いする次第である。

○ 角重始氏（昭和二十五年一月二日生）は、昭和四十七年広島大学教育学部高等学校教員養成課程社会科（歴史）卒業後、広島大学大学院文学研究科修士課程国史学専攻に入学、

昭和四十九年同上修了、文学修士、引き続き同上博士課程進学、昭和五十年同上退学、広島県総務部県史編纂室に勤務、指導主事として広島県史編纂の大事業に取り組み、主として中世史部分を担当して、その完成に大きな功績を挙げられ、県史の仕事も終了したので、本学の助教授として御就任いただいたのである。先生の御専攻は日本中世史であるが、殊に備後国太田荘の研究を基盤にして我が国の荘園公領制の史的展開を跡付ける努力をしておられ、近い将来に中世史研究選書の一冊として『荘園公領制と領主制』を公刊されようとしている。本学にも地域文化研究所設立の気運もあることであるし、先生の御活躍を期待したいものである。

○ 菅原敬三氏（昭和十九年七月十三日生）

は、広島大学教育学部高等学校教員養成課程国語科を昭和四十二年御卒業、引き続き広島大学大学院文学研究科修士課程国語学国文学専攻に進学、昭和四十四年文学修士、その後故郷の福岡県で戸畑中央、戸畑二高校の教諭を勤められ、昭和五十四年に広島大学付属中高等学校の教諭に転じられ、今春井上先生の後任として本学助教授に御就任いただいた。先生の御専攻は中古文学研究を基盤とした国

語教育の研究である。長い高等学校での教育実践を通して、周到な教材研究を重ねておられ、中高における国語科の教育指導には定評のある方で、これまでの教育実践を基盤にして、本学国文学科・初等教育学科の国語科教育法の充実に力を尽していただくとともに、中古文学の読解力の向上にも努力していただき、先生の研究課題が大きく発展することを期待したいものである。

○ 下垣内和人氏（昭和五年三月十九日生）

は、お若い時御両親の男は手に職をつけるべきだとお考えに従って大工職の修行をされ、それをマスターされた後、向学の念止みがたく尾道短期大学国文科に進学され昭和二十九年同上卒業、直ちに呉市立長郷小学校教諭となられ、昭和三十五年九月には通信教育で日本大学文学部（文学専攻国文学）を御卒業、昭和三十六年呉市立警固屋中学校教諭に転じられ、昭和五十七年まで呉市内の中学校に勤務、その後三年間本学の非常勤講師をしていただき、今春から本学助教授に御就任いただいたのである。この間、先生は俳文学の研究に心を寄せられ、従前未調査であった芸備俳壇の資料収集から仕事を始められ、時には現存最古の芭蕉点の新資料を発見して学界

に衝撃を与えられたこともありで、芸備俳壇史研究の第一人者として活躍され、昭和四十九年には『芸備俳諧史の研究』の大著をまとめられた篤学の士である。最近も続々と地方俳諧の翻刻を発刊しておられ、本学地域文化研究の一翼を荷っていただける方として大いに期待しているところである。本学が地域と密着した大学として発展していく上で、極めて貴重な人材であると信じている。（横山）

## 文教國文學 第十七号

昭和六十年九月二十日 印刷  
昭和六十年九月二十五日 発行

（非売品）

編集者 広島文教女子大学国文学会

代表 湯之上 早苗

発行所 広島市安佐北区可部町上原 一三三八

広島文教女子大学

国文学研究室内

広島文教女子大学国文学会  
（振替）広島六一三四八九四

印刷所 溪水社